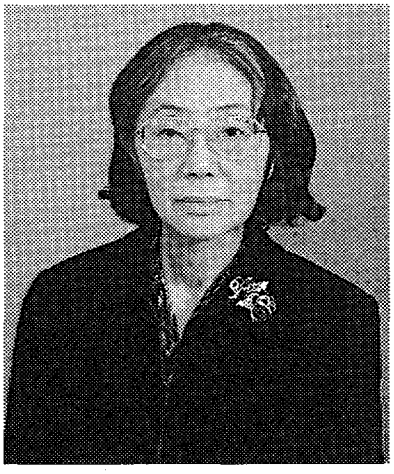

清田信子教授

# 河の流れによせて

植野達郎

日々、授業の準備をし、学生たちを教え、時に会議に出席し、などと教師としての仕事をこなしているうちに、いつの間にか時が流れていきます。一年が過ぎ、五年が、十年が過ぎていきます。おそらく清田先生も気がつけば、定年を迎えているといった心境ではないでしょうか。

先生は昭和４８年から実践女子短期大学英文学科の専任講師として勤務され、昭和５３年から実践女子大学英文学科に移られました。先生は学生時代も含めますと、人生のかなりの部分を実践女子大学・短期大学で過ごされたわけで、渋谷キャンパスの時代、日野に移った頃、そして現在の姿を目にしているわけです。キャンパスが変わることは、学生気質も変わることにもなったのではないでしょうか。学生の気質は変わったとしても、先生は実践の卒業生として、学生の一人ひとりに接していて、特に問題を抱えた学生に対しては、細やかな心遣いをしていらしたことが印象に残っております。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」と記した鴨長明にならって言えば、実践女子大学という河に、毎年、毎年入学してくる学生は変わっても、流れる水は変えてはならないということでしょうか。実践の卒業生として、古き良き時代の実践をうかがわせる清田先生が去られるわけですが、残された者に求められていることは、そのような過去の実践を引き受けながらも、新たな実践を作り上げていくことだろうと思います。

時代の変化を受け止めつつ、変えるべきところは変え、守るべきところは守って、実践女子大学らしさを、英文学科らしさを失わないようにしていこうと思います。見つめていてください。